

汲古書院刊

富士川英郎・松下 忠・佐野正巳編

詩集日本漢詩

第六卷

詩集 日本漢詩 第六卷(第一期第七回配本)

昭和六十一年七月 発行

定価八、五〇〇円

編者 富士川 英郎

松 下 野 正 已

佐 野 正 已

解題 坂 本 健彦

発行者 モリモト印刷株式会社

発行 汲古書院

102 東京都千代田区飯田橋二―五―四
電話(六五)九七四 振替東京五―五〇三

©一九八六

解題

佐野正巳

草廬集

著者

龍草廬、この人の履歷については、「詞華集日本漢詩」10の「金蘭詩集」の解題のところで記述しているので、ここでは省略したい。ただ、京都市東山区高台寺にある墓碑銘を左に参考資料として置くにとどめる。それは次のものである。

艸廬龍先生之墓

貞香菅婦人之墓

(碑裏面)

先生姓龍名公美字君玉号艸廬伏水人以文学仕彦藩正徳四年甲午春正月十九日生寛政四季壬子春二月二日卒享年七十八即葬於斯

先生配菅氏名蘭京師人享保十七年壬子秋生天明七季丁未九月六日卒享年五十六即葬於斯

生年について「近世叢語」、「龍草廬略年譜」(中野三敏氏)などとは一年の差がある。中野氏などは正徳五年説をとっている。

本文内容と特色

「草廬先生集」初集の序を書いた鳥山宗成と井鼎臣についての説明からして置く。

鳥山宗成については「日本詩選」の「作者姓名」の条に、「字世章、号崧岳、俗称宇内、越前府中人、業医浪華、兼以此文称」とあり十八首も「日本詩選」に採詩されている人である。また井鼎臣については、「日本詩史」の巻五に「本姓千村氏、号夢沢、玉壺詩稿載其詩六十余首」とある。「玉壺詩稿」とは、「日本詩選採擇書目」にも「玉壺詩稿木公達著已刻」とあり、尾張藩儒木下蘭皐撰の「玉壺詩稿」（一卷付三卷四冊、元文四年刊）をいうのである。したがって井鼎臣は、同藩の藩儒千村夢澤であって、その子が著名な千諸成である。序文に続いて、門人室聚士錦の撰文になる「龍艸廬先生伝略」が掲げられている。そしてそのあとに「初編詩部目録」があり、詩体別に詩数が掲げられており、巻数は五巻で全部で三四五首を数えることができる。

「艸廬集初編」の編輯者は「平安 幡君英文華 輯」とあって、小幡太室のことと思われる。名は文華、字は君英。太室山人と号す。生没未詳、医者である。京都の人。幡文華、幡英、幡太室と修す。そして初編の巻之四、巻之五にその名が頻出する。

全巻を通じて盛唐詩を鼓吹していることが明らかで、「子夜呉歌」（巻之一）「搗衣」（巻之一）「塞上曲」（巻之二）「少年行」（巻之二、巻之五）「聞搗衣」（巻之二）「従軍行」（巻之五）「塞下曲」（巻之五）「征婦詞」（巻之五）などの詩題をもつ作品が散見する。「草廬文集」初編に「大凡自風格声調、以至字句鎖碎之法、直不取標準於盛唐諸家、則奚以有得之者耶。」とある表現は参考となろう。盛唐詩を理想とする盛唐詩鼓吹論である。「思郷」七絶一首（巻之五）の享保十二年ごろの作品から「戊辰年元旦咏龍」五言律一首（巻之二）の寛延元年までの作品を収めている。そして、宝暦四年、五巻三冊として刊行された。

「艸廬集」一二編は、序文は付せず、「詩部目録」が本文の前にあり、初編と同様に詩体別に詩数があげられている。

ただ、卷之二の七言古詩と五言排律とだけは体別の名称だけ挙げてあつて作品が収められていない。したがって総数は五卷三冊で四八六首を数える。

卷之一の古詩には不自然であるが盛唐詩の詩題が多く用いられ、卷之二は、京都での詠作が多く、卷之三は浪華での詠作多く、宝暦五年の殆どを浪華に仮寓している。また「予臣^{タル}於日光大王^(日光門跡)者数年矣」の記述や卷末に「応^ス聘^ス將^ス移^ト家於彦城^ニ述^テ懷^ヲ以留^リ別^ス平安諸君^ニ」という記述があるによつて大凡この二編は宝暦三年から宝暦四年までの作品が収められているのである。本篇には、又詩題として奇抜なものがある。「寄^レ内」「寄^レ家」といったたぐいの奇をてらう傾向の作品がある。

編輯者の平信美文韶と校閲の荒忠俊孟彦の両者が二編の跋文をそれぞれ書いている。それによると、この二編は宝暦八年の春に成立している。

「艸廬集」三編は、序文がなく冒頭に「詩部目録」が付いている。編輯は「湖上 盖九齡伯寿」とあるが、「日本詩選」の作者姓名に「盖九齡字伯寿、加藤氏、称^ニ庄五郎、江州清水人」とある人で、「日本詩選」に詩一首を収める。校閲は、源康純こと、彦根藩家老松平康純がしている。松平康純。名は康純。倉之助と称し、字は少卿、寒松子と号した。野村襄園の門人で詩人であつた。「艸廬詩集三編跋」文を書いている。三編の跋文は松平康純のほか袁景陳と岡崎廬門の跋文が付いている。袁景陳は、「日本詩選続編」の作者姓名に「袁景陳、字希寔、称^ニ遠藤多内」とある人で草廬の門人。「日本詩選続編」に詩二首を収める。袁景陳はまた「艸廬集」七編の序文をも書いているのである。

三編も詩体別詩集で、「詩部目録」に詩数が明記されている。六卷三冊よりなり詩数五二八首を数える。そして、宝暦十年から明和二年春までの作品を収めている。

その間、明和五年に門人松平康純が注目すべき跋文を卷末に識している。それは次のものである。

蓋当^一今之世、海^一内称^{スル}善^{スト}詩者、車^{モテ}載^セ斗^{モテ}量^ル。而^レ要^{スルニ}之皆明^一家王^一李之奴隸耳。求^{ルニ}其能得^ニ唐^一調者、寥^一々乎^{トシテ}

亡^レ幾^{クモ}矣、吾^カ艸^カ廬^カ先生、亦蚤^{クニ}好^ミ明^テ詩^ヲ、而^モ尽^{セリ}其^ニ蘊^ヲ。然^ナ知^ス是^ニ猶^モ未^レ其^ニ極^ニ、遂^ニ直^ニ遡^リ于^ニ盛^ニ唐^ノ諸^ノ家^ニ、特^ニ剋^ニ意^{シテ}
於^ニ青^ニ蓮^ニ、以^ニ優^ニ入^ニ大^ニ雅^ニ之^ニ域^ニ也

当今の詩人の多くは明の王李の奴隷に過ぎず能く唐調を得る者は殆どいいことを指摘し、草廬は明詩の蘊奥を究め尽くしたが明詩に対して「未其極」と明詩だけでは不十分であるとし直ちに盛唐に遡って李白に剋意して大雅の域に入つたとしている。つまり、護園派の明詩は唐詩への階梯であるとする詩論を批判するにいたつた。つまりこのごろから護園派と異なる詩論をもっていたことになる。

「艸廬集」四編は、序文がなく、奥山共建の編輯である。奥山共建、彦根藩士、五百石。藤と修姓す。名は共建、字は子樹。華山・華嶽と号す。通称、六郎次郎、次いで右膳、さらに六左衛門。龍草廬および野村東皐の門人であつた。「日本詩選」・「大東詩集」などにその詩がみえる。

校閲は、石井元彰である。名は元容、字は子兌。白圭と号す。「後題」に彦根中大夫とあるから彦根藩中老。菅元彰と修した。「日本詩選姓名」にもその名が見え、詩一首が採録されている。

両者は四編巻尾にそれぞれ後題を書いている。「跋」文は美濃での受業生の宮田維禎。維禎は名、字は士祥。嘯台と号し、平作と称した。また江村北海の門人でもあつた。「後叙」は岡崎廬門が書いている。廬門について詳しいことは五編の解説の項で記述する。

四編も本文の前に、「詩部目録」があつて詩体別になつており、詩数が書かれ、「惣計四百三十九首」と明記されている。六卷三冊よりなり大冊とはいいがたい。本編には、宝暦十年十月、彦根侯に従い京へ入つたとき作つた五言絶句一首を三編に脱漏したのを門人遠藤多内が宝暦十三年に編刊した「昼錦集」（二冊）で載せたほかは、明和五年から明和八年までの作品を収めている。そして翌安永元年八月に編成り、安永三年ごろに刊行された模様である。（書誌参照）

このように、三編と四編とは編成ってから刊行までの期間が短かいのは彦根藩の藩学からの助力によるものであり、藩蔵版的性格が強いのである。

四編が刊行された安永三年の冬に、草廬は彦根藩を致仕しているのである。

「艸廬集」五編は、岡崎廬門の序が冒頭にあり、続いて「詩部目録」があり本文となる。岡崎廬門については、京都延年寺墓地の墓碑銘を検するに次のごとくある。

廬門先生岡崎君諱信好字師古号彭齋称平太郎京師人享保甲寅十一月三日生廬門街綾巷之南幼而喪父長而嗜學師事伏水龍子博涉羣書旁善文辭所著數十書或既行于世或未上木咸以裨益後生稟質多病終身不仕天明丁未三月二十六日以疾歿于家年五十四葬于洛東鳥部山先塋之側慈正孺人沢田氏諱直以宝曆丁丑歲嫁廬門先生而生二男二女天明甲辰七月十二日歿年四十九

本編は、やはり詩体別に編集されており、八卷三冊より成っている。「通計五百首」を数え、明和八年から安永六年までの作品を収めている。岡崎廬門の序が安永八年に撰文されているところから、この頃、編成り、それ以後刊行されたものとおもわれる。

「艸廬集」六編には、本文の前に三人の門生の序文がついている。城戸公賢、中臣元美、上林元楨といった順である。編輯者は右のうち城戸公賢と中臣元美の二人である。各巻首に、

門生 郡山 城戸賢 公賢 同輯
角鹿 中臣元美子光

とある。

城戸公賢（延享元—寛政十一、一七四四—一七九九）、名は賢、字は公賢。芙蓉と号す。郡山藩儒。藩士城戸富恭の子。四日市生。安永九年郡山に移り、天明元年京邸の吏となり七年間、京都に住み江村北海、龍草廬と詩交を結んだ。序文は天明三年京都

時代に書かれた。寛政五年に儒臣となる。徂徠学派。

中臣元美は、序に「越前氣比祠官中臣元美子光」とあるところから出自が知られよう。扱、此編から「彦藩前文学」と著者名の上に冠しているのが特徴である。各巻とも次のような同校者があった。

平安	枳	知影	
門下	播磨	枳	惠鏡
平安	宮部正富	同校	
備前	難波之猷		

本編の配列は、詩部目録はないが、詩体別になっている。そして安永四年から天明三年までの作品を収める。同年の冬、編成り、草廬の歿後の寛政七年の六月に三編三冊にして刊行された。

五言律	四八首
五言排律	一首
七言律	五一首
五言絶句	二七首
七言絶句	一九七首
七言絶句	二二七首

卷之一
卷之二
卷之三

総計五五一首となっている。

「艸廬集」七編を序した袁景陳は、江村北海の「日本詩選続編」の作者姓名に「袁景陳、字希寔、称「遠藤多内」とあり、詩二首を収める。龍草廬の門人で、本集にその名が頻出することは「艸廬集」三編のところで述べた。遠藤多内は、「艸廬集」三編の跋文も書いているばかりでなく、宝暦十三年「幽蘭社昼錦集」(二冊)を編刊している。

この七編も、六編同様に詩部目録を付けず、詩体別となっている。

五言律 一八首

七言律 四五首 卷之一

五言絶 三一首

七言絶上 一五七首 卷之二

七言絶下 一四〇首 卷之三

そして安永五年から寛政四年までの作品を収めているのである。三卷三冊よりなっている。

以上別集で七篇三十六卷二十一冊という膨大な詩集を残した江戸時代の詩人として龍草廬において他にないといつても過言ではない。

書誌

艸廬集初編―七編大二十一冊の底本には国立公文書館内閣文庫所蔵本（206／37）を使用した。以下各編毎に書誌事項を略述することにする。

〔初編〕

使用底本 内閣文庫本 五卷大三冊 縹色表紙 題簽は四周双辺で「龍艸廬先生集

初編詩部」
五（第三冊、第一・二冊

は欠落）。見返はない。宝暦四年「張州 千良重鼎臣父」の序1と宝暦三年「南越 烏宗成世章」の序2がある。奥

附は次頁の通り「享和元年 皇都 書林 錢屋利兵衛」刊で、後印本である。

この奥附の広告から初―七編は享和元年までに全巻完成したことになっているが、後述の通り内閣文庫本七編は享和三年の奥附となっている。51%縮小。

龍艸廬先生詩集
初編二編三編四編
五編六編七編
各行三冊

龍詩類選
一名艸廬絕句選
小本全一冊

草廬詠物詩集
全一冊
同
草廬尺牘
小本全一冊
文集
全部三冊

古語字樣
國風無音
經史文碑
全一冊
武南窓著

古語草體選
全一冊
二言三言

經史莊岳音
韋廉士音
四書五經
小學十八史畧
各書子部

草書要領
合本二冊
題畫詩選
小本
詩文故事標
右之書
本朝律詩選
全
本朝絕句選
近刻

享和元年辛酉冬求之

寺町通四條上北町

皇都書林

錢屋利兵衛

詩部自初編至七編通計三十六卷

草廬集

二、筑波大学図書館本 初編―七編大七冊 題簽は四周单边で「艸廬集」とあり下に「一」が書きこまれている（第一冊）。見返・序・第七編末奥附とも一の鶚軒文庫本と同一であるから、題簽のみ異なる文政九年補刻本である。

三、国会図書館鶚軒文庫本(B) 詩文³⁷⁵⁶ 初編―三編大七冊のみ存。香色表紙で、題簽は使用底本とほぼ同じ。見返はない。序1は一の鶚軒文庫本(A)と内容は同一であるが書体が異なる。序2は宝暦四年「三川 松平秀雲士龍」の序で、これは鶚軒文庫本(A)の三編序と同じである。序3まであり、使用底本の序1と同じ。奥附は

京 都	衛門改称
龍 元 二 郎 著	
艸廬先生文集初編文之部 嗣出	
宝暦三年	今井喜兵衛
皇都書林	林 権兵衛 発行
谷口勘三郎	

となっており、本書が初印本であろう。但し宝暦四年序がある以上、実際には四年刊とみるべきであろう。

四、静嘉堂文庫本 54/40 初二編大二冊のみ存。香色の後補表紙で、題簽・見返はなく、序は三の鶚軒文庫本(B)と同じであるが奥附を欠いている。同一本かあるいはその後印本であろうか。

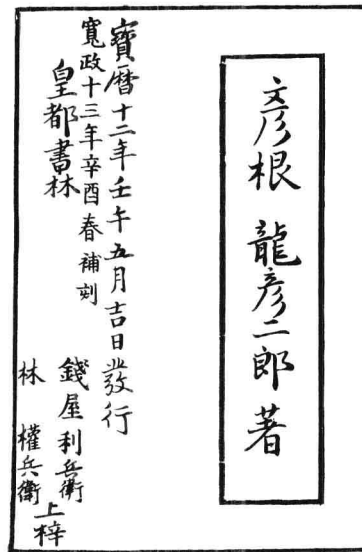
五、国会図書館鶚軒文庫本(C) 詩文³⁷⁵⁷ 初編大二冊（中下のみ存） 縹色表紙で、題簽は四周双边「龍草廬先生集再刻 中」（中冊）。奥附は使用底本三・四・五編の奥附と同じ享保二年補刻版であるが、版元の一つ「錢屋利兵衛」の右側にその所在地「三条通柳馬場東へ入ル町」が刻入されている点異なる。

以上から、初編は宝暦三年（実際には四年か）版（国会図書館鶯軒文庫本(B)）が初印で、享和元年本（使用底本―内閣文庫本）・享和二年補刻本（国会図書館鶯軒文庫本(C)）・文政九年補刻本（国会図書館鶯軒文庫本(A)）の順に刊行され、その間に刊年不明本が介在することになろうか。なお、故長澤規矩也氏蔵本は寛政七年（卯初春）の再刻本で、著屋儀兵衛の支配となっている。

〔二編〕

使用底本 内閣文庫本 五卷大三冊 序なし。

奥附は



となっており、寛政十三年補刻版である。51%縮小。

諸本

一、国会図書館鶯軒文庫本(A) 五卷大一冊 使用底本初編序1と同じ宝暦四年「張州 千良重鼎臣父」の序がある。奥附なし。「文政九年補刻本」である。

二、筑波大学図書館本 五卷大一冊 右の鶯軒文庫本(A)と同じ。

三、国会図書館鶯軒文庫本(B) 五卷大合一冊 奥附は使用底本にある「寛政十三年辛酉春補刻」がなく、版元名が
 錢屋利兵衛から「寺町松原下ル町／今井喜兵衛」に変わり、もう一軒の版元林権兵衛の右肩に「間之町御池上ル町」
 と所在地が刻入されている。宝暦十二年の初印本である。

四、静嘉堂文庫本 五卷大合一冊 右の鶯軒文庫本(B)と同じであるが、奥附のみを欠くのは初編と同様である。

以上から、二編は宝暦十二年本(国会図書館鶯軒文庫本(B))が初印本で、ついで寛政十三年補刻本(使用底本―内閣文庫本)・文政九年補刻本(国会図書館鶯軒文庫本(A))の順に刊行されたことが知られる。

〔三編〕

使用底本 内閣文庫本 六卷大三冊 序なし。

奥附は

龍草廬先生詩集	初編 二編 三編 四編 各三冊 五編 六編 七編 各一冊 全行出来
龍詩頼選 一名草廬絶句選	小本 全行出来
草廬先生詠物詩集	全部一冊 新刻出来
題畫詩選	全一冊 松竹集
本朝律詩選	全一冊 本朝純句選
享和二年壬戌之春 補刻發行	寺町通 条下町 林 權兵衛 二条通 御馬場 東大町 林 伊兵衛 寺町通 四条上町 錢屋利兵衛 三條通 御幸町 南角 著 屋儀兵衛
皇都書林	

となっており、享和二年補刻版である。51%縮小。

諸本

一、国会図書館鶯軒文庫本(A) 六卷大一冊 鶯軒文庫本(B)初編序2と同じ序が付されている。奥附なし。初二編同

様文政九年補刻版である。

二、筑波大学図書館本 六卷大一冊 右一と同一本。

三、国会図書館鶯軒文庫本(B) 六卷大三冊 使用底本および諸本一・二の跋は卷六の末にあるのが本書は卷首目録の前の前に付いている。奥附は

彦根 龍彦二郎 著

明和五年戊子正月

寺町松原下ル町

今井喜兵衛

皇都書林

間之町御池上ル町

林 權兵衛

堀川仏光寺下ル町

梓 壽

河南四郎右衛門

尾州名護屋

風月 孫助

勢州津

山形屋傳右衛門

となつており、明和五年の初印本である。

以上から、三編は明和五年本（国会図書館鶯軒文庫本(B)）が初印本で、ついで享和二年補刻本（使用底本―内閣文庫本）・文政九年補刻本（鶯軒文庫本(B)）の順に刊行された。

〔四編〕

使用底本 内閣文庫本 六卷大三冊 三編と同じ奥附の享和二年補刻版である。51%縮小。
諸本

一、国会図書館鵜軒文庫本(A) 六卷大一冊 四編末には奥附はないが、文政九年補刻版である。

二、筑波大学図書館本 六卷大一冊 右の鵜軒文庫本(A)と同一本。

使用底本である享和二年補刻版と文政九年補刻版では序跋の位置が若干異なるほかはほぼ同一本である。明和九年・安永三年の序跋があることから安永三年頃の初版と推定されるが今回の調査では初印本を見出し得なかった。

〔五 編〕

使用底本 内閣文庫本 八卷大三冊 三・四編と同じ奥附をもつ享和二年補刻版。51%縮小。

諸本

一、国会図書館鵜軒文庫本(A) 八卷大一冊 五編末に奥附はないが、文政九年補刻版である。

二、筑波大学図書館本 八卷大一冊 右一と同一本。

安永八年の序があることから同年かそれ以後の刊行であることは明らかであるが、初印本は見出し得なかった。

〔六 編〕

使用底本 内閣文庫本 三卷大三冊 寛政三年「龍門弟子若桜部徳近」跋の裏に「寛政七年乙卯六月」の年記があり続いて平安書肆として「吉原莊助・澤田吉左衛門・林権兵衛・同伊兵衛」の版元名が列挙され、更に初編奥附と同じ「享和元年辛酉冬 求之／皇都書林 錢屋利兵衛」奥附がある。寛政七年版が初印で、本書は享和元年後印本である。51%縮小。

諸本

一、国会図書館鵜軒文庫本(A) 三卷大一冊 使用底本にある跋末の「寛政七年乙卯六月」の年記はあるが、それに続く版元名は削除されている。奥附はなく、文政九年補刻版である。

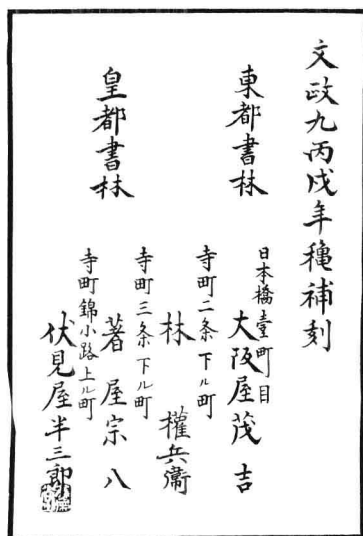
二、筑波大学図書館本 三卷大一冊 右一と同一本。

〔七 編〕

使用底本 内閣文庫本 三卷大三冊 国会図書館鶯軒文庫本(A) (文政九年補刻版) 初編にあるものと同じ見返がついている。奥附は「享和三年亥夏発行」で「皇都書林・彦根書林／林伊兵衛から銭屋九兵衛」まで五軒の連名となっている。51%縮小。

諸本

一、国会図書館鶯軒文庫本(A) 三卷大一冊 見返はなく、奥附はつぎのごとくなっている。



これまで京都・彦根の版元による刊行だったものを江戸の大阪屋茂吉が加わり、初―七編をまとめて補刻刊行した版である。

二、筑波大学図書館本 三卷大一冊 右一と同一本。

艸廬集七編三十六卷は、宝暦四年から享和三年まで五十年をかけて刊行された。初編は草廬四十歳の時で、全巻の完成十二年前、寛政四年にこの世を去ったのである。